様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ９ 月 ２５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３８３

研究課題名（和文）新世代ディアスポラの系譜書き換え―告発の文学の求心性とダブルバインド

研究課題名（英文）The rewriting of the genealogies in the new generation diasporas-The centripetal force and double bind of the literary works of complaint

研究代表者
鈴木　道男（Suzuki, Michio）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：２０１８７７６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：移動の自由を得て生活の場を広げた新世代ディアスポラによる現代文学の多くは，それに相前後して，束縛を打破し，ディアスポラ外部及び内部の抑圧を暴露してきた。新世代には，近年ネット上を中心に系譜学的自己探求の動きが活発で，そこには，従前の系譜からの意図的書き換えが多く観察される。これには，実は体制の変化自体よりも，告発の文学に影響された，自己意識の変革が顕著で,同時に文学が内包する自己認識のダブルバインド状況も強く反映していることを確認した。そしてその様相を複数のディアスポラ集団において描出し，告発の文学の最も切実な読み手である新世代が描く自己像とその根拠を確認した。

研究成果の概要（英文）：Many of the new generation diaspora minorities got recently opportunities of free migration and free expression. Their modern literature has disclosured the oppressions from inside aud outside to them. We can generally observe their own exertions of geneaological self-traces especially in their internet pages. And there we can see sometimes the intentional rewriting of their genealogies. We confirmed that it is caused not only by the political changes but also by the changes of their identities and the rewritings are influenced by their double bind situations of their identities expressed in their literary works. We confirmed the situations in several diasporas and the self-portraits of the new generations expressed in the literatures of complaint.

研究分野：比較文化論

キーワード：ディアスポラ　系譜　告発の文学　トランシルヴァニアのドイツ人　チェコのロマ　ヘルタ・ミュラー　ダブルバインド

１．研究開始当初の背景

平成 17 年に共同研究を開始した我々のグループは，ディアスポラ集団がその集団を維持するにあたり，文学に関して特徴的に見られる現象として，以下の 4 点を順次明らかにし，その具体的状況を吟味してきた。

1) ディアスポラの維持に不可欠である**の求心性の象徴と言うべき機能を果たす文学が存在すること**

2) グローバル化の中で，移動の自由と文化比較に関する知見が飛躍的に拡大し，ディアスポラの成員は，所属すべき文化とアイデンティティを自ら選択すべき機会に必ず遭遇する。その際に，陰に陽に文学が参照され，集団及び**個々の行動の決定に際して文学が醸成した基本的情調が大きく影響すること**

3) 歴史的に観察すると，そのアイデンティティは時代とマイノリティのおかれた状況とともに，変化している。**変容しながらも紐帯となり続けるアイデンティティの参照規範を，更新しながら提供し続けることこそ，実は文学の役割となっていること**

4) 現代のディアスポラには，自身の文学および歴史的資料に関して，極めて旺盛な**アーカイヴ化の努力を継続し，ディアスポラの記憶を蓄積し**，それが紐帯形成の一翼を担っていること。

昨年までアーカイヴ調査において，我々は最新の文学作品とその受容について新たな知見を得た。どのマジョリティにおいても，グローバル化に伴い世界に活路を見いだす動きが活発だが，ディアスポラにおいては，それが早くからより活発であったことが様々な社会学的調査が証している。各アーカイヴは，離散の民であるディアスポラが，さらに再分散した，狭い空間に束縛されない世代(これを我々は**新世代ディアスポラ**と呼ぶ)の記憶の中核でもあった。調査の過程で，現地必読作品として紹介されるものに，対外的摩擦のみならず，集団内部に存在した抑圧の装置を告発・暴露する内容を中心とするものがあった。そして新世代が関心を向けて消費するのはそのような文学であることを，重要な事実として指摘されることが度々あったのである。かかる文学は，求心的紐帯の機能の他に，ディアスポラ自身の存在観を根本的に揺さぶる働きをもつ。2009 年ノーベル文学賞を受けたヘルタ・ミュラーの近作 *Atemschaukel**はドイツ系住民のナチズムとの共犯性と,それに起因する過酷な処断の両面を描いたが，作品が与えた衝撃，それが持つ求心性と排除性の両面が起こすダブルバインド状況を反映したネット上の系譜作成作業を，一例として挙げうる。ミュラーは，誰が誰を抑圧していたかを描くことにおいて，一切の妥協を排した。それを最も切実に身をもって読んだのは，当該ディアスポラであった。

我々の研究グループは，こうした作品群は，**我々が 2)および 3)で描いた求心性・規範性を備えた紐帯として観察される文学の一般像とは別して，特に詳細に検討すべきものである**との認識で一致した。なぜなら，**そうした文学はディアスポラ像の美化・固定化を阻止し，分散する・しないに関わらず，新世代ディアスポラが，古いマイノリティ空間を改めて精神的に客観視するに至った理由を余すところなく代弁し，しかしその必然性をも描出するとともに，逆に抑圧の構造の必然性をも前景化することで，ディアスポラおよびその成員の系譜とその描出法にまで変更を迫り―即ち文学が歴史を書き換える―ことでアクチュアルな問題を提起しているからである。**この書き換えは，体制変革により急に行われたというよりは，告発の文学を参照し，それに促され，励まされ，反発もしつつ，暴露された負の遺産を清算しながら徐々に進行しているのである。

２．研究の目的

我々は明確に把握すべき目標として以下の 3 点を設定した。

1) ディアスポラをめぐる政治体制の変化と告発の文学を短絡的に結びつけることはできない。対象とする作品に関しては，この二者の関係を精密に把握することを，各メンバー共通の前提とする。作品の成立環境の研究は，一般的な文学研究の基礎的前提と同一のプロセスだが，殊にディアスポラの精神構造の変化を論じる場合，文学が社会変革に及ぼす影響の大きさが無視できず，両者の関係は相互的であることに注意を要するのである。この場合，トランシルヴァニアのセーケイ人のように，特に抵抗の文学をもたない少数集団自らの系譜の通時変化も比較参照する。**(ディアスポラをめぐる体制の変革と告白の文学の定位)**

2) ディアスポラの自画像及びその描出の通時的変遷描出作業，即ちジーニアロジーに及ぼされていた体制による操作の影響の描出。これはディアスポラを取り巻く政治状況の客観的観察と，系譜作成の動きが強まった時期，および系譜の変化との関係を通時的に比較整理する作業でもある。我々の対象領域の場合，主として第一次大戦期までさかのぼることが必要であると観測している。通常，何らかの政治情勢の変化がディアスポラの自己認識に変化を生じさせたとする場合，この観察を持って十分であるとすることもありうる。しかし我々はこれを，告発の文学の効果の検証としての予備的段階と位置付け，それを見据えた準備を行うのである。**(ディアスポラのジーニアロジーに対する政治的操作の問題)**

3) 世界文学の中に確たる位置を占めたヘルタ・ミュラーの作品を契機に活発化した，ルーマニア独裁政府時代のスパイの告発などにおいて端的に観察されるように，告発の文学が暴くディアスポラ像には，系譜の尊厳を傷つけかねない側面が十分に存在する。かかる文学の受容が新世代ディアスポラ自体と成員の内面に及ぼす様々なレベルでのダブルバインド的葛藤の状況を，受容美学的方法論などをふまえつつ，正確に描出する作業。**(告白の文学の二重拘束性とディアスポラの系譜学の変容)**

以上 1)～3)の問題について，研究代表者及び分担者の専門領域であるルーマニアのドイツ系ディアスポラ，チェコの少数民族集団およびタミル人を中心とするインド・スリランカ系ディアスポラという各対象分野の状況に即して，それぞれ焦点となっている問題に則して力点を移動させながら，各ディアスポラ文学を対象として具体的に明らかにする。これらは 3 年を期間とする本研究の射程として必要十分な作業量に相当するものであると予測している。我々はこれをもとに，告発の文学が新世代ディアスポラの結束の紐帯維持に対する複雑な機能についての総論を形成することまでが可能であろうと考えている。

３．研究の方法

本研究の目的達成のための具体的研究内容は，ディアスポラ集団(及び個人)が形成し，公開した諸系譜の文献およびインターネット空間からの調査・直接作成者に向けたインタビュー調査と，告発の文学に関する文献収集と分析作業，そしてこれらの関係に関する分析である。それにあたり，前年度までに把握し，接触することができたディアスポラ文献の多様なアーカイヴとの交流を保持し，それらからの情報を活用する。系譜作成に関する多面的把握とその相対化のためかねてより組織している，異なるディアスポラを研究対象とする 4 名の研究者の共同研究の体制を継続する。各研究者の事例研究に基づき，年 4 回を目処に発表と討議の場を設ける。それを受けて研究代表者が議論と研究実施計画を取りまとめる。分担テーマは以下の通りで

ある。

1）研究体制

① 鈴木道男（研究代表者）：戦後ズィーベンビュルガー・ザクセン文学による集団的記憶の掘り起こしの意味

16 世紀以来トランシルヴァニアのザクセン人の精神的支柱であるルター派新教の牧師であった作家エギナルト・シュラットナーは，自らがルーマニア独裁政権時代に政府のスパイであったことを告白する作品を発表し，ディアスポラ内外に大きな衝撃を与えた。この衝撃は，彼らが描き出すディアスポラの系譜にまで影響を与え，書き直しを迫った。彼の作品、及び同時代の文学集団などのディアスポラ内部における受容を軸に，文学受容のレパートリー理論の観点から，作品世界と現実のディアスポラの内面の響きあいの様相を描出し、告発の文学がディアスポラによる歴史の書き換えを促している様相を観察・記述し、その民族誌上の意義を考察する。

② 山下博司（研究分担者）：シンガポールにおける告発のディアスポラ文学の意味

シンガポールでは，国家主導でマイノリティ文学の蓄積が進められている。そこには多民族国家の統合という合言葉のもとに，マイノリティの自立性に干渉し，文学的伝統の意味づけを都合よく再編しようとする意図が見え隠れする。特に華僑とタミル人ディアスポラに焦点を当てこうした動きに抗する文学活動の意味を，二つのディアスポラの自画像である系譜作成作業に照らして検証する。

③ 藤田恭子（研究分担者）：ルーマニア・ドイツ語文学におけるナチズムの過去の「克服」―ノーベル賞作家ヘルタ・ミュラーの試み―

ルーマニア西部（バナート）のドイツ系住民（シュヴァーベン人）も進んでナチズムに協力した。ヘルタ・ミュラーは，その状況および処罰として課された強制労働の悲劇をつぶさに描き，それへの言及を避けて作られたシュヴァーベン人の系譜とその作成のあり方に大きな書き直しを迫っている。これに促されるかのように、近年ナチス時代のディアスポラに対する研究にスポットが当たり始めている。ミュラーの作品の画期的な意味を検証し，現在のシュヴァーベン人の自己認識に課された矛盾克服作業との関係を明かす。

④ 佐藤雪野（研究分担者）：チェコのロマを代弁する国外の告発の文学

チェコやスロヴァキアのロマにより描かれた文学作品の多くは韻文で，散文作品のほとんどは，回想文学と児童文学に限られてきた。その中で，ロマでもなく，チェコ人・スロヴァキア人でもないアイルランド人作家の英語作品として，戦間期・第二次世界大戦期・社会主義期のスロヴァキアのロマを描いた長編小説（Colum McCann, *Zoli*, 2007, 邦訳 2008）が生まれた意義を考察し，ロマ自身によるロマ文学，非ロマによるロマを題材にした文学の今後を検討するとともに，この作品が引き起こしたロマの自己像に対する変化を検証する。

４．研究成果

1) ディアスポラをめぐる体制の変革と告白の文学の定位

2) ディアスポラの自画像及びその描出の通時的変遷描出作業，即ちジーニアロジーに及ぼされていた体制による操作の影響の描出。 **(ディアスポラのジーニアロジーに対する政治的操作の問題)**

3) 世界文学の中に確たる位置を占めたヘルタ・ミュラーの作品を契機に活発化した，ルーマニア独裁政府時代のスパイの告発などにおいて端的に観察されたように，告発の文学が暴くディアスポラ像には，系譜の尊厳を傷つけかねない側面が十分に存在した。かかる文学の受容が新世代ディアスポラ自体と成員の内面に及ぼす様々なレベルでのダブルバインド的葛藤の状況を，受容美学的方法論などをふまえつつ，正確に描出した。**(告白の文学の二重拘束性とディアスポラの系譜学の変容)**

以上 1)～3)の問題について，研究代表者及び分担者の専門領域であるルーマニアのドイツ系ディアスポラ，チェコの少数民族集団およびタミル人を中心とするインド・スリランカ系ディアスポラという各対象分野の状況に即して，それぞれ焦点となっている問題に則して力点を移動させながら，各ディアスポラ文学を対象として具体的に明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9　件）

① Kyoko Fujita:“ Auf der Suche nach den Stimmen der "Marginalisierten" -Bemerkungen anlaesslich der Veroeffentlichung von "Die Buche. Eine Anthologie deutschsprachiger Judendichtung aus der Bukowina". In: Decuble, Gabriel H./ Grossegesse, Orlando / Irod, Maria / Sienerth, Stefan (Hrsg.): "Kultivierte Menschen haben Beruhigendes.." Festschrift fuer George Gutu. Bd.1, 2014 Bukarest/Ludwigsburg (Editura Universitatii din Bucuresti/ Editura Paideia / Editura Pop), S. 112-125. 査読あり。

② 藤田恭子「集団的記憶装置としてのアンソロジー　―ブコヴィナのドイツ語文学アンソロジー史をめぐって―」、『上智大学　ドイツ文学論集』第 50 号（ドイツ文学科百周年記念特別号、上智大学ドイツ文学会）、2013 年 11 月、,85-92 頁。査読あり。

③ 藤田恭子「多民族国家の解体と《ドイツ人》意識の変容　―両次大戦間期ルーマニアにおけるユダヤ系およびドイツ系ドイツ語話者を事例に―」、『ドイツ研究』第 48 号（日本ドイツ学会）、2014 年 3 月、43-55 頁。査読あり。

④ 山下博司「インド 4000 年の宗教史を紐解く　－宗教の曙から最新動向まで－」.[『ヨーロピアン・グローバリゼーションと諸文化圏の変容　研究プロジェクト報告書』第Ⅴ号（東北学院大学オープン・リサーチ・センター）, (2012), 139 頁-153 頁]査読あり。

⑤ 山下博司「スリランカ移民とヒンドゥー寺院 －カナダ、ドイツ等に取材して－」pp.471-472.[『宗教研究』,第 87(第 379（第 4 輯）,(2014)]査読あり。

⑥ 山下博司「ヨーガ人口の急伸　抵抗運動と反権力で接点」（世界宗教地勢　インド）.[中外日報社　『中外日報』, (2014)]査読なし。

⑦ 佐藤雪野「チェコの古典的文学作品に描かれた「ジプシー」像」、『国際文化研究科論集』(20),(2012),17-28]査読あり。

⑧ 佐藤雪野「ジプシー」とは？.[東北大学国際文化研究科共同研究プロジェクト『不可視の隣人たち』第五回上映討議 GYPSY CARAVAN 解説, (2014), 4-5]査読なし。

⑨ 鈴木道男「アントレアス・シュミットの『フォルク・イム・オステン』序説」、『国際文化研究科論集』第 23 号（東北大学大学院国際文化研究科）2014 年 12 月、45-58 頁。査読あり。

〔学会発表〕（計　2　件）

① 山下博司「スリランカ移民とヒンドゥー寺院－カナダ、ドイツ等に取材して－」、日本宗教学会第 72 回学術大会、2013 年 9 月 8 日（日）於國學院大學

② 山下博司（シンポジウム・パネリスト）発表題目「グローバル化のなかのヒンドゥー教―東南アジアのタミル寺院などを中心に―」、国際シンポジウム「グローバル化する思想・宗教の重層的接

触と人文学の可能性」2013 年 9 月 21 日（於京都大学人文科学研究所）

〔図書〕（計　2　件）

① 藤田恭子『「周縁」のドイツ語文学　―ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち―』東北大学出版会、2014 年 2 月、全 476 頁。

② 山下博司「グローバル化のなかで変容する社会―混成化・越境・均質化―」『地域研究』［総特集　混成アジア映画の海―時代と世界を映す鏡―］（京都大学地域研究統合情報センター発行・昭和堂発売）、Vol.13, No.2, 2013 年 4 月、359-368 頁（岡光信子と共著）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　道男（SUZUKI, Michio）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20187769

(2)研究分担者

山下　博司（YAMASHITA, Hiroshi）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20230427

藤田　恭子（KYOUKO, Fujita）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80241561

佐藤　雪野（SATOU, Yukino）
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：40226014

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：